

維新の宸翰

明治元年三月十四日
○太政官日誌

朕、幼弱を以て、猝に大統を紹ぎ、爾來何を以て萬國に對立し、列祖に事へ奉らんやと、朝夕恐懼に堪ざる也。竊に考るに、中葉朝政衰てより、武家權を専らにし、表は朝廷を推尊して、實は敬して是を遠け、億兆の父母として、絶て赤子の情を知ること能ざるやふ計りなし、遂に億兆の君たるも、唯名のみに成り果、其が爲に、今日朝廷の尊重は、古へに倍せしが如くにて、朝威は倍衰へ、上下相離るゝこと霄壤の如し。かゝる形勢にて、何を以て天下に君臨せんや。今般朝政一新の時に膺り、天下億兆、一人も其處を得ざる時は、皆、朕が罪なれば、今日の事、朕自身骨を勞し、心志を苦め、艱難の先に立、古列祖の盡させ給ひし蹤を履み、治蹟を勤めてこそ、始て、天職を奉じて、億兆の君たる所に背かざるべし。往昔、列祖萬機を親らし、不臣のものあれば、自ら將としてこれを征し玉ひ、朝

廷の政、總て簡易にして、如此尊重ならざるゆへ、君臣相親しみて、上下相愛し、德澤天下に洽く、國威海外に輝きしなり。然るに近來宇内大に開け、各國四方に相雄飛するの時に當り、獨我邦のみ世界の形勢にうとく、舊習を固守し、新の效をはからず。朕、徒らに九重中に安居し、一日の安きを偷み、百年の憂を忘るゝときは、遂に各國の凌侮を受け、上は列聖を辱しめ奉り、下は億兆を苦しめん事を恐る。故に、朕、こゝに百官・諸侯と廣く相警ひ、列祖の御偉業を繼述し、一身の艱難辛苦を問はず、親ら四方を經營し、汝億兆を安撫し、遂には萬里の波濤を拓開し、國威を四方に宣布し、天下を富岳の安きに置んことを欲す。汝億兆、舊來の陋習に慣れ、尊重のみを朝廷の事となし、神州の危急をしらず。朕、一たび足を舉れば、非常に驚き、種々の疑惑を生じ、萬口紛紜として、朕が志をなさざらしむる時は、是、朕をして君たる道を失はしむるのみならず、從て列祖の天下を失はしむる也。汝億兆、能々、朕が志を體認し、相率て私見を去り、公

義を採り、朕が業を助て、神州を保全し、列聖の神靈を慰し奉らしめば、生前の幸甚ならん。